

## 第6回松本市中央図書館あり方検討委員会 議事録

日時：令和3年1月25日（月）13：30～17：30

場所：松本市中央図書館 第1視聴覚室

### 【出席者】

伊東委員長、菊地副委員長、森委員、森田委員、吉成委員（テレビ会議で参加）  
（事務局）瀧澤中央図書館長、羽田野館長補佐、町田館長補佐、栗田館長補佐、  
百瀬主査、内山主査、丸山（和）主事

### 1 開会

### 2 議題

#### (1) あり方検討まとめ

#### 伊東委員長：

お忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございます。最後の委員会を始めさせていただきます。

今日はお手元の素案を検討していただきたい。前回、『はじめに』の下から2番目の段落に各委員のありたい姿をまとめたものを記述して結論的なことを述べたいということになった。具体的な内容は最終の会議で入れるということしたので、ご覧のような形の記述である。次ページに『松本市の図書館が目指すべき将来像とは』ということを書いてある。言ってみればここがメインだが、ここがまだ完成していない状態で最後の会議を迎えているというのも切ないという気もするが、メインだからこそ最後に完成させるのだという気もしなくもない。

この辺のボリュームをどのくらいにするのか、みなさんのイメージをお聞きしたいが、おそらく『将来像』の要約的なものが『はじめに』にくると思うので、ここが議論のメインになるということかなという想像をしている。

その後に委員5人がそれぞれ書いてみるということで、五十音順で伊東から載っている。これはみなさんの原文を報告書の様式に落とし込んだだけだ。これで1章が終わり、2章の『将来像を実現するために』で「あるべき姿を実現するためにどうするんだ」ということで、『求められるサービス』の中身として、まず情報ネットワークに関すること、次にICTの関係、その次に『市民の「学び」と「活動」をつなげるために』という3項目が載っている。(2)として『求められる職員や運営体制とは』ということで、ア「職員は目と耳、そして体を地域に向けよう」、イ「管理運営形態」をどう考えるのかというのがあり、(3)『求められる施設や設備や立地とは』が続き、最後の『おわりに』につないである。

その後に、『参考資料』。以前は前の方にあったものだが、後ろの方でいいだろうということで、以降、最後で参考資料が載っている形で報告書ができています。

2月17日に私が館長とともに教育委員会へ行き、教育長に報告書をお渡しする。

最後なので、言い残しのないように。あるいは、素案を見ていただいて、「ここはね…」というのがあれば、それも是非、言っていただきたいと思う。

ひとつ、細かいことだが、『はじめに』の私の名前は取りたいと思う。ここは委員会でいいのではないかな。

菊地委員：

構わないと思う。形式上、委員長名が必要なのかなと思っていたが…。

伊東委員長：

委員みんなの総意で作っているので、『委員会』でいいと思う。細かいことから言いました。みなさんのご意見を…。

菊地委員：

ざっと目を通したなかでいくつか気になったところがあったので、挙げていきたい。

素案の中ほどに『情報弱者』という言葉が出てくるが、この言葉のニュアンスが、この文意の流れのなかで汲み取りづらかった。「図書館に来ることが困難だから、情報にキャッチアップできない市民のみなさん」ということを、ここでは『情報弱者』という表現で言っていると思うが、この情報社会において『情報弱者』という場合は、どちらかというオンラインにアクセスすることが環境的に整っていない、あるいは、苦手意識があってパソコンを持っていない、スマホを使いこなせないという自覚があるという方々のことを『情報弱者』と呼ぶ。

この文章は、「図書館に来ることができないから情報にアクセスできないため『情報弱者』」という話なのだが、読み違いをする方は、今の社会には多いかなという風に感じたので、何か別の表現ができないかと思った。

代案としては、この最後の一行を「何らかの理由で図書館に来ることが困難な地域住民に対しても優しいまちづくりの可能性も見えてきました」と、『情報弱者』という言葉を使わない方が、誤読を防げるかなという風に思った。

2点目、駐車場問題の話が出てくるが、駐車場が必要だという認識に基づき、「駐車場の増設もしくは駐車場がなくても中央図書館へのアクセスがスムーズにできる方策を考えていく必要がある」としているが、松本市の交通に関する基本的な方針というか、考え方としては、特に松本城を中心とする中心市街地には、なるべく自家用車の乗り入れというものを減らしていった、ここは通過交通にしていくということがある。この辺りはなるべく歩行者と自転車が通行しやすいようなまちづくりを目指していくという方向性があると、認識している。

特に市長が、『セントラルパーク構想』という構想があるなかで、おそらく、この中央図書館も、どちらかという車の乗り入れを歓迎するというよりも、車のない方法でアクセスを求めるようなことになるのではないかという想像をするにつけ、ここで駐車場の増設というのを第1案として持ってくることに、やや違和感があった。ここは議論が必要な部分だと思うが、個人の意見としては、ここに「駐車場の増設」を明記するのではなく、どちらかという、「もしくは」のあとに書いてあることの方にフォーカスした方が、今の市の方針と合うのかなという所感を持った。

3点目、『おわりに』の最終パラグラフ、最後の「また、サービスの量と質の両面を合わせて評価できる指標（数値目標）を掲げ、評価と改善を繰り返し、常にアップデートし・・・」という部分。これはそのとおりだと思うが、個人の文章でも書かせていただいたとおり、松本市の基本構想2030というこの先10年間の基本的な目標というものが、量から質への転換を求めていくというような内容になっており、数値的なものの追求ではなく、計量より形成で物事を量っていくという、その評価軸にマインドチェンジしていこうということを謳っている。僕の文章の中でも「量から質へ」ということがあるなかで、この『おわりに』で改めて「数値目標」という言葉が出てくると、図書館に止まらず、松本市全体の大きな方向軸から最後の最後でちょっとズレてしまうというところがあるので、「数値目標」という言葉は、ちょっとそぐわないかなという印象がある。

伊東委員長：

最後のパラグラフの「数値目標」は、ふたつ上のパラグラフにある『図書館サービス基本計画』が、来年度に予定されているので、多分、その段階になると具体的な目標というものが出てくるので、当然、数値もそこには出てくだろうというのを意識しているのかな、という形にはなる。

菊地委員：

現場で数値目標が必要なことは、経営しているのでよくわかる。もちろん、当月の売り上げ目標は必要だし、それに対してどれだけ成果が出たのかという利益は数字で見るが、この報告書の締め「ザ・数値目標」があることに違和感がある。正直、この括弧書きを外していただければ、それでいいという風にも思う。

伊東委員長：

ああ、なるほど…。

菊地委員：

指標が必要なのは確かなので、「評価できる指標を掲げ、評価と改善を繰り返し…」という話であれば、それですっきりするのだが。

伊東委員長：

『おわりに』は、全体ができあがったあと、もう一回最後に見直しして書かなきゃいけないだろうと思う。ホントのホントの『終わり』なので。

「みなさん、ありがとうございました」という終わりではないので、とりあえず書いて、に近いのかな。

森委員：

今の最後の話題は、前提として、「量は数値で表せるが、質は数値で表せない」というのが共通認識なのだろうか。

従来の図書館関係の統計は、本当に量的なところしか見られず、図書館のパフォーマンスの一面しか評価できていないので、そこを見直そうという動きがある。質的評価の方法は、多分、業界全体の大きな課題。コロナの影響で苦しいのは、来館者とか、貸出数とか、レファレンスの数とか、そういうものしか評価軸がないので、休館せざるを得ないと、「図書館は、何をしていたんですか？」というような姿しか表れてこないことが問題なので、そういうところはちょっと含みを持たせてもいいのではないかなと思った。

菊地委員が指摘された、最初のところについて。私も『情報弱者』は、言葉の使い方というのか、ネガティブなキーワードをあまり使いたくないという観点から引っ掛かっていたので、直していただく案でいいと思った。

より直接的には、来館しなくてもできることを強みにして、もっともっとそこを伸ばしていくという話だと思う。最終的には、どんな図書館の活動も、地域やまちを良くしていく、人を幸せにするっていうことにつながっていくと思うのだが、この文脈では、やはり図書館サービスが、館に来なくてもできる可能性が開けてきたということを言いたいのかな、と思っていた。

伊東委員長：

それは伝わりやすいように、全体の見直しはしなければいけないので、具体的に言っていた方がやりやすい。

**森委員：**

「学びと活動をつなげる」は、インプットだけではなく、アウトプットまで図書館の守備範囲だと言っていると思う。

「地域住民の拠点としての機能の強化も必要です」と言っているので、交流の拠点になることが、学びと活動がつながるといことでいいだろうか。

この会議でも何回か出てきたことで、市民の学びと活動をつなげたいというのは分かる。ただ、「松本市図書館に新しい場としての空間を設置する予定はありませんが」とあり、「交流拠点としての機能の強化も必要です」とある流れでは、どうすれば学びと活動がつながると言っているのか、分かりづらい。あとは、『活動』というのが何を指すのか、そこがちょっと分かりにくいと思った。

もうひとつ、「静かな読書人だけのための図書館という既存概念を壊す」のところは、静かな読書人を排除したいわけではないと思う。しかし、ネガティブな言葉を使うと、静かな読書人は「あ、もうお呼びじゃないのかな…」と、思ってしまうかもしれない。既存概念は壊さなきゃいけないが、壊される側の人はどう感じるのか、言葉の使い方には十分に配慮したい。

他にも、とても厳しい自己批判が書かれているが、「錯覚に陥る」など、ここまで書いてしまうと、厳し過ぎないだろうか。今までやってきたことを肯定しつつも、そこで満足して止まってしまうのではなく、「さらに先が期待されているから、その期待に応えよう」というような言葉の方がいいのではないかという気がする。

2(3)の「求められる施設や設備」について。下から二つ目のパラグラフで、「アンケートの自由記述には…」「さまざまな声が寄せられました」とあり、「これらの声からも」と受けているので、寄せられた声に出てきた内容がくるのが自然だと思うが、今は従来からある機能が列挙されている。アンケートの声を生かすのであれば、直接つながるように書く工夫が必要かもしれない。「市民の声を受けて」というところは、今はないけれど、これから力を入れなければいけないことを訴えていくような文脈が必要だと思う。

とは言え、新しいことだけを書いて、やらなければならない基本的なこと、当然、これからもやっていくことがないとアンバランスなので、バランスよく書かなければいけないところに苦労があると思う。

**伊東委員長：**

現状の課題をどう表現するというのは確かに難しい。やり過ぎると本当にネガティブに、暗いものになりがち。どちらかというと事情が分かっている人たちが見ているので、背景がよく見えるのだが、そうでない人たちが見ると、「思ってもいなかった悪いことが、いっぱいあるのか…」「そうだったのか…」というようなところへ落とすというのは、変かもしれない。

**菊地委員：**

この報告書をベースに、来年度、「図書館サービス基本計画」を作っていくということが控えているなかで、この報告書には、職員みなさんも目を通されますよね。

そうなったとき、森委員のご指摘はもっともだと思うのは、職員みなさんが読んだときに自分たちのことを批判とか、攻撃されているように感じてしまうような表現で溢れていると、次のモチベーションにつながらないのではないかという懸念がある。

「あ、そうか。これは確かに、今できてなかったことだった」と、自覚が芽生えて、「じゃ、これをなんとか改善していこう」というような、前に向けるようなメッセージであってほしい。現

場のみなさんが、そういう受け止め方ができるような表現が望ましいと思う。

**伊東委員長：**

今日はそこが一番の苦労どころ。「だからといって、それを柔らかにすると、何も気づかない人がいるかもしれないし…」というような。これはこれでキツイ言葉だが、そこから突っ込まないと始まらないのも事実。痛しかゆしというところではある。

**森委員：**

アンケートを見て「こんなにがんばっているのに、どうして?」「こんなに資料費あって、たくさん本買っているのに、どうして『読みたい本がない』って言われるんだろう?」というギャップが、一番、気づきにつながるのは確か。外部から言われて、できるきっかけになることもあるので、大事なことだとは思う。

**森田委員：**

細かいところの指摘はまだできないが、言いたいところを少し整理すると、「図書館はパワーアップしていきます」というようなことだと思う。パワーアップするところがどこかという、例えばICTなど、さまざまだが、本質的なところをもう少し押さえたい。

ICTにしても、図書館はインフラを支えると思うので、リテラシーをキチッと学べる、分かるようになるとか、活動と言っても、一人でやる活動もそうだが、みんなでやる活動は「協働」というように、ともに力を合わせるというようなことを学んでいく場というリテラシーを学べるというような感じで、パワーアップするところが書かれていると、「なぜやるのか」ということが分かると思う。

先ほどの菊地委員の駐車場の話は、まさにまちをどうするかという話なので、本当の意味での『まち』というか『広場』。やはり、まちには広場が必要なので、「図書館がそういう役になるよ」と、パワーアップしていくということのなかで、駐車場問題も、当然、どうするかという話になってくる。

あと、『弱者』というのも、何等かの不便を感じている方というのが、障害を持った方だったり、高齢で体が動かなくなってきたり、怪我をして、一時的に不便を感じている等、さまざまな要因がある。そうした不便を感じている方の力になるというようなこと。支えなければいけない人に対して、「こうして支えていく」というパワーアップ。

HUB（ハブ）のように人と人をつなげるようなパワーアップの仕方もある。今までは喋ることすら禁止されているような館内だったから、つなげることができない状態だった。「静かなのがいいか、喋ってもいいか」というような話はあるが、「つながっていくために、話をする」ということが出てくると、さまざまな取り組みが、なぜ必要なのかということが分かるのではないかな。

この報告書は、庁内に向けても図書館のプレゼンスを上げるいい機会なので、何で図書館がパワーアップするといいのかという話として、読んでいて分かるようになればいいなと思っている。

**伊東委員長：**

今、森田委員が言われたことは、「目指すべき将来像とは」に入り込んでくる部分になっていくと思う。その意味では報告書用の言い方をするとどんな言い方になりますか？

**森田委員：**

委員のみなさんが今までにもう言われていること。私を含めて5人の文章に今の話は、ちゃんと入っている。

**伊東委員長：**

それをまとめた形でここに入ってくるのかなということになるかな、と、想像をしているところではある。

**森委員：**

箇条書き的に書く？ やはり文章で？

**伊東委員長：**

決まっているわけではないが、今、箇条書きで書かれている、こういうイメージではないと思う。

**森委員：**

森田委員が言われたように、「パワーアップします、これから良くなります」ということを言うためのこの報告書。困っている人に寄り添う図書館だとか、そういうようなキャッチコピー的なことを出すのか主語は委員会だが、「私たちが目指しているのはこういう図書館です」というのを、端的に短い言葉で列挙すると、読む方に伝わるかなと思った。

**森田委員：**

やはり、一言では言えない。一言で言うと、総論賛成的な、みんなそう思っているようなことになってしまう。

**森委員：**

「松本市図書館が目指すべき将来像とは？」と問われたら、「基本構想 2030 を実現する図書館です」と言うしかなくなってしまう。「学都松本のシンボルとなる図書館になってください」とか、象徴的なキャッチーな言葉がある程度ここに書かれるのではないと思う。

**伊東委員長：**

箇条書きにしても、文章にしても同じなのだが、箇条書きで始めると、網羅しなければならないような雰囲気があるが、網羅しきれないので、それこそ今言われたように「基本計画を実現する図書館であるためには…」と、少し書くくらいにしておく方がいいのではないかと考えてみたり、もっと言うと、「委員がここに書いたのを読んでください」と書けば、それでいいような気もしている。そんなにいろいろ書かなくてもいいのかな、というような。

**森委員：**

見開き2ページくらいの分量？

**伊東委員長：**

図も入っているので、そんなイメージでしょう。それくらいのイメージだとすれば、箇条書きにせよ、文章にせよ要は1枚になる。ちょうど菊地委員が「松本市基本構想 2030」の市民会議に出られていて、それを追っかけている検討委員会でもあるので、「そういう松本市の一翼を荷う図書館であるべき…」というように言わざるを得ないかなという気はする。

基本構想に図書館は、入っている？

菊地委員：

図書館というフレーズは、よくよく読んでいけばあるっていうくらいで、具体的にはない。

基本構想も文章量としては多いので、この報告書でいう『はじめに』に当たるところには図書館という文言は入ってこない。個別具体的な政策として基本計画に落とし込まれて、教育委員会としての基本計画になると、当然ながら入ってくることになると思うが、全体を包括する『構想』では、図書館に限らず、個別的な施設の名前は出てこない。

吉成委員：

例えば、岐阜の場合だと、「シビックプライド」という言葉が政策優先の2番目にあり、そのシビックプライドを醸成していくものとしてメディアコスモスがあって、それを支えるものとして図書館が位置づけられるという構成。松本市の基本構想の前文には図書館という言葉は入ってこないと思うが、岐阜の例のように読み込めるものがあるのかなのか、というあたりを聞ければ、教えていただきたい。

伊東委員長：

基本構想を支える柱が何本かあって、「その柱の1本は図書館が入ってる柱だよ」という位置づけがあればね。

吉成委員：

そうです。それがつながっていればいいのですが…。

菊地委員：

そういう意味では、今回の基本構想で市長が最後に「豊かさと幸せに挑み続ける3ガク都」というキャッチコピーを加えている。3ガク都の最初は山岳のガク、松本市民は日々の暮らしのなかで、豊かな自然環境に親しみ、次が音楽のガク、文化芸術を楽しみ、最後が学びのガク、生涯ともに学び続ける、という言葉で締められている。最後のガクとして、生涯ともに学び続けるという言葉においては、学び合いというものが、生涯学習も含めて、市民の一生を支えるものとしてあるという宣言でもあるので、これは、図書館というところに落とし込み得るフレーズなのかなという風に思っている。

今回の基本構想の肝になっているのが、目標というものを「こういう状況を目指しましょう」というような、いわゆるビジョンというよりも、行動指針というフレーズのもとに、行政側も市民側も「こういう行動を具体的に起こしていきましょう」という行動が掲げられていること。それが全部ひらがな表記で、『みとめる』から始まって、次に、『まなぶ』、『いかす』、『つなぐ』。最後が『いどむ』。そのポンチ図が図解になっていて、5つがグルグル循環しているような画になっている。

いわゆる多様性というものを認め合い、それぞれ学び合うということを深め合うなかで、学んだことを生かし合っていて、それを次世代につないでいくというイメージ。…ということで、次に向かったチャレンジをしていこうということになっていて、最初に言った「豊かさと幸せに挑み続ける」、「挑む」というのは市長がずっと散々言い続けている言葉。選挙公約からずっと、「静から動へ」と、動かしていくということを言っている市長なので、それを最後にもってきている。

吉成委員：

うーん、なるほど。

菊地委員：

ここでも、『学ぶ』ということを市民及び行政、どちらにも求められる行動指針として謳ってはいるので、「そこを支える図書館」というような言い方は、十分できるのではないかと。

吉成委員：

そうですね。

森委員：

基本構想があって、それと同時並行的に、菊地委員という接点を持ちながら検討してきた報告書が、まさに同じ方向性を向いていて、「それを実現するひとつの具体的な取り組み、活動です」と。「だからこうなります。」と宣言してあるのは、とてもいいように思う。

菊地委員：

建付けとしては、きれいだと思う。

吉成委員：

そうだね。

森委員：

本当は、トップダウンで基本構想にはっきりと図書館が位置づけられていて、それをもとに、予算要求するものだと思うが、そこまで盛り込まれてなくても、こちらが前向きに受け止めて、提案できるものにしたらいいいよな…。

伊東委員長：

それをやってくしか、しょうがない。

吉成委員：

それを実現するための学びのライブラリとか学びのセンターについて、図書館はそのところをやっていきますよ、というような流れが見えると縦軸が見える。

菊地委員：

市を挙げて取り組んでいることとしては、デジタルトランスフォーメーションが大きい。

今、内閣府の特例区として申請をしようとしており、そのために副市長2人体制をとっている。この件を主に担当する副市長が秋に任命され、先日のオンライン市民説明会では「デジタルトランスフォーメーションに関してこういうことをやっていきたいと、松本市としては考えている。これを内閣府に出す。」という案が出された。そのときも、基本構想2030の五つの行動指針の循環に対してデジタルというものが、どう補助線を引けるのかというような切り口で説明をしていて、宮ノ本副市長は多分、早くも基本構想に寄り添っているから、「だからやっていけるんだよ」というような見せ方をしていた。

そういう意味では、この図書館の報告書のなかでもデジタルというものが、言わば、下支えをしていくというような…これは森委員のご自身の原稿のなかにもあるが、そういう視座が書かれているので、そこはすごくいいという風に捉えている



**森田委員：**

図書館は行政のなかにはあるが、独立機関というか、あらゆることに対して自由な考え方を進めることができる場所。だから、市の方向性がこうだからそれに対してどうのこうのという言い方ではなく、「みんながニーズとしてそういうことを感じていることに対してもサポートしてあげる」という風に言わないと、自由が尊重されないというか…。

**森委員：**

わかります。理解はできます、とても。

**森田委員：**

常に市民の望んでいることに対して応えるということであって、時の市政の方向性的なことに従って云々というようなことは言わない方がいい。ここは気をつけないといけないところ。

**森委員：**

長野県の話をしていただくと、長野県も『しあわせ信州創造プラン』（長野県総合5カ年計画）が、バージョン1.0から2.0になるときに、平賀前館長が図書館を明確に位置付けられた。それを根拠に改革が進められている状況がある。私の任期中に、3.0への橋渡しがあるので、そこにも載せていただきたい。ただ、みんなといつも話しているのは、県立長野図書館のミッション・ビジョンは『しあわせ信州』を実現する手段のひとつになるとともに、それ以前に、もっと長いスパン、大きな視野での図書館のミッションがあるはずだということ。そのなかで、「今はこういう方針で県政が進んでいるので、そこに沿う形で事業を行っています。」と説明したいと考えている。森田委員が言われることは、とてもよく分かる。

**森田委員：**

言いたかったことはそれ。書き方の問題ではあるが。

**菊地委員：**

その意味でも、我々が一人ずつ書いたということが、効いてくるのかなという風に、今、聞きながら思っている。そこを意識して、完全に市民会議の委員としてこの文章を書いた。

市民であり、市民会議の委員でもあったというところを前面に出しながら書いたので、これが報告書のなかに含まれるということにおいて、この図書館の報告は、全般が基本構想2030は見据えたうえだという文章がアピールになるのではないかという気はする。そのうえでどうするか、ということだと思うが…。

**伊東委員長：**

「書き方」だから難しい話になる。

行政が動くのには、行政の計画に乗っているのが大事なのは間違いない。今の話は、ちょうど基本構想が出てきたことを生かす方向でいいが、寄り添う姿勢を示すことはない、という意味なのだろう。そういうことで書いていけばいいと思う。

この五つの行動指針に『まなぶ』があるので…、というのが先ほどの説明？

**菊地委員：**

はい。

伊東委員長：

僕の解釈でいくと、これはこの図を見ながらやっちゃいけないことだが、「図書館って、この行動指針の五つとも、全部やれるじゃん」という切り方をしてしまう。それをやり始めると計画の中に位置づけられなくなっていくので、行政手続きとしては、うまいやり方ではない。とは言え、実際は『つなぐ』とか『いかす』とか、日頃でも言っている言葉が並んでいるという気がしているので、無理やりこの五つを並べる必要は全くないと思う。「全体のあり方として」の捉え方の下地にはしてもいいような気はするが…。

この『はじめに』、ここに何行か入れたい。ここのところが重たい。何をもってくるのか…。なにか言おうとすると、自分が書いたものに行ってしまうようで…。

森田委員：

そうなる。そうことだと思う。

伊東委員長：

そうすると、それをどう拾い上げていけばいいのかという話をしなければならないのだろう。「読書だけの場所ではない」というのは、「無料貸本屋ではない」という言い方ではなく、こういう言い方にしたということだろう。やはり、資料もあって。資料には量も質も求められるものだと思っている。その意味では松本市は恵まれているのは間違いないのだろうが、上手く使えてこそ「恵まれている」と言えるので、まず、基本ができているということ。

「資料」と言ってしまうと本だけのように感ずるが、『情報』だと思う。紙に書かれていようがデジタルであろうが。情報を松本市民に届ける。『つなぐ』、役立てるのが、松本の図書館のあり方なのだろう。その「あり方」としては、まず情報をきちんと集めて、整えておいて、用意しておくという第一段階と、それを『つなぐ』という行動の部分がある。その行動の部分、今まで「読書」という言葉でばかり語られてきたので、どうしても『貸出し』に走ってみたい…という図書館文化がそこにはあると思う。でも、『貸出し』はもちろん、それとしてやってかなければならない。児童サービスも、もちろんやってかなければならないが、そのうえでさらに、地域のいろいろな切り口がまだまだ…山のようにある。その一つひとつに『情報』が必要なので、その情報を届けるべき場所にきちんと届ける仕事もやるということが、イコール、松本市の図書館のあり方だろう、それをやるということがあるべき姿だろうというのが、僕の書いた内容。だから、結局、書いた内容を言うだけになってしまう…。

森委員：

最初の方に「一部の読書好きな人のための静かな場所ではない」とある。「じゃ、誰のものですか？」と言ったら、みんなの…市民全員のものということ。それは吉成委員が書かれている文章の中に出てくる。「図書館は誰のためのものなのか」という問いの形ででてきている。

役に立つ図書館には情報が必要。役に立つとは、人間と人間の、人同士のつながりを作ったり、活動する場所だから役に立てる。そこには情報もある。森田委員の文章に、「図書館というのは、こういう場だ」というものがたくさん列挙されているが、この活動を継続していくということが大事で、それが自治であり、松本の未来を拓いていく。だから「図書館の役割は何ですか？ 目的はなんですか？」と言われれば、松本の未来を拓くことであるはず。だから、本当にみなさんがおっしゃるとおり、書いてあることを抽出してひとつの文章につなげることで、本当にいい前書きができるだろうと思う。

キーワードとして切り出されているところが共通点だと思う。共通点も大事だし、共通点プラスαも大事だと思う。共通点だけだと、それぞれの個性が抜け落ちてしまう。

この人の文章にしか書いてないけど大事なこと、というのを足すことで、肉付けされると思う。共通点は本当に骨格として絶対に必要だが、共通点だけでは多分、丸まってしまう。まだ抜き書きできてないような大事な要素が残っているような気がする。

さっき列举したキーワードは全部、委員のみなさんの文章からピックアップしたこと。『学都松本』とか「誰のための図書館か」という観点、「何のために図書館はあるのか、松本の未来を拓くためだ」などのキーワードは、それぞれが書いた文章の文脈の中で出てきている言葉なので、それを抽出して一本につなげるのは難しいと思う。森田委員は前回、それは至難の業だから、やらなくていいのではないかと言われたのだと思う

**森田委員：**

絶対こうなるから…。「これを読んで」と、言って終わるとというのが、まあ…。

**菊地委員：**

伊東委員長がご自身の文章の序盤で書かれている、「表現は5者5様になりますが…」というところは、「今までの図書館が行ってきたことは、図書館がなすべきことの道半ばである」という認識に5人とも、まず立っているということで、その後、この点においては意見が大きくは異ならなかったと思うという見解なので、そこは5人とも「うんうん」とうなずけると思う。

で、「意見の大きな差異はなかった」って認識して、意見についてこの1の部分で書くということなのだろうかと思っていた。

ここは5人の共通見解として、「こういうことだったよね、もともと、そもそも」と、いうところ。ここの『目指す将来像』として書くという風に思っていました。

**伊東委員長：**

そうすると、今、菊地委員が読まれたところを、みなさんが「うんうん」と言ってくれば、それを出してくれば、おおよそできるような…。

**森田委員：**

確かに…。

**菊地委員：**

先ほど森委員が言われた個々人の個性というか、特に強調したいところは、当然ながら、それぞれのバックグラウンドや今現在の立場で違うので、そこは森田委員のご提案どおり、我々一人ひとりの言葉で書いているので、「そこ読んで」という話だと思う。

そういう意味では、まずは伊東委員長に、ここで書いた「意見に大きな差異はなかった」という認識を我々全員が共有しているであろうと考えている認識というものを、それこそ箇条書きでもいいので並べていただいて、「ああ、そう。そこは…それはそうだよ」と、コンセンサスが取れたら、それは1に書くところだと思う。

**伊東委員長：**

その部分は5者5様になるが、その後、3行くらい…。

これ以上踏み込むと、それぞれになっていくような気がして…。

**菊地委員：**

もう半歩くらい踏み込んでいけば、いけるのではないかと思います。

例えば、「今までの図書館が行ってきたことは、図書館がなすべきことの道半ば」のところをもう少し具体的に、何がどうであることが道半ばなのか、「もっと地域に役立つ仕事をしなければならぬ」というところは、もっと地域の、誰たちに対してどうアプローチすることが、その地域に対して役立つ仕事をしていることになっていくのか、というようなこととかで、それができるはず。「できるはず」と感じているのは何故なのか。ICTはまだ活用できていないので、こういうことで『御用聞き』とかをしていけば、「もっと図書館が地域に開いていけるでしょ？」ということには、この会議の1回目から全員が「うんうん」と、頷けるポイントがいくつもあつたはずなので、そこを改めて挙げていくということなのかと思う。

「それができるはずという立場で『同じベクトル』を持っているからだと思います」という、その『同じベクトル』とは何かというところ。

5人が共通して持っていたベクトルというものが、つまり、この委員会が提案したい松本市図書館の将来像だと思う。「この方向に進んでいって！ 松本市図書館」というのが、矢印が向く方向であり、目指すべき姿のはずです。では「この5人が共通して持っていたベクトルってなんだろう？」というところを最終回でもう1回、抽出し直せば…。

**吉成委員：**

例えばそういう、みんなのものであったり、「役に立つ」というのはどういうことであるのかということであったり、それを継続するために得ることがこれからの図書館としてどういう意味を持つのかということをもとめるだけで、もう十分、言っていることにはなるだろうと思っている。

さらに、森田委員の最後のパラグラフの言葉をもう一つ加えたい。それに、『共通のベクトル』プラス、そのイメージのようなもの。

「図書館はまさに奇跡の公共施設です。あらゆるひとが座れる「席」が用意されています。誰もが安心して居られ、《だいじなもの》を思い起こすことができる時間が流れています。」というのが、目指すべきイメージとして非常に分かりやすいものなので、そういう言葉も私たちの間で共通認識にできれば、それも加えてほしいと、読んでいて思った。

普通、「図書館のあり方」と言うときに、こういうイメージは入れないが、何かに置き換えて、イメージが浮かぶような言葉で…ということでは、森田委員の言葉はいいと思った。

**森田委員：**

「席が用意されている」というのは、公共というものにおいて、よく表現されている言葉。誰もが座れる『席』ということで、「居場所がある」という風に言っている。

まとめることは全然できないが、「資料は大事」という観点がまずある。その資料は、ただ単に「こういうのが必要だろう」と思って揃えているだけではなく、外に出ていろいろなニーズを聞いて揃えるところからできることがあるという資料だという考え方を、伊東委員長がまず言われた。そして、人が集まらないうと、その資料が手渡せない。「集まる」の意味は、電子的なものも含めて。「人を集める」「人とつなぐ」ということがなければ、いくら良い資料があっても、サービスできなかったことになってしまうので、『人』『集める』…『集まってもらおう』をどうつなげられるか。そのために場所的なもの、空間、情報空間も含めて、『空間』というものが要だという、『資料』『人』『空間』の3要素。『サービス』という言葉もあるが、それは、その要素がどう作用するかの話なので、この3つに対してそれぞれが言っている言葉を引用してくればいいの

ではないか。

森委員：

その3要素が基本だと思う。実は全部それで説明できてしまう。

森田委員：

そして、『ベクトル』と言っているのは、一個一個…今の3要素のベクトルが合っていると。

森委員：

このポンチ絵の「目指す姿とサービス」が3要素で説明できて、それを両側から支える『職員』と『施設・設備』という風にできるのではないか。せっかくポンチ絵を入れているので、ポンチ絵を説明したものになるといいのではないか。「絵にまとめるところですよ」という…。

一つの方向性に向かいながら、三角形の頂点の方に向かいながら、左右からこう、下支えしている『人』と、『施設・設備』があることでそれを実現していくということ。情報はサービスの中に入ることだろうか。

この絵はとてもきれいだ。シンプルで、とてもいい絵だと思った。

菊地委員：

話題がポンチ絵に及んだので、ちょっと逸れるかもしれないが、発言したい。

ポンチ絵はすごくきれいで、いい絵だなと思う。我々は「目指す姿に向かって下から登っていく」というイメージを共有してこの三角形を見るから「いい絵だな」とすぐに思えるが、そうしたものが無い状態でこれをパッと見たときはどうか。

中心にサービスがあり、『目指す姿』と書いてあるので、上に向かっていく図だと分かるが、その一方で、目指す姿、職員体制、施設・設備の3つがサービスに向かっていくという見方もできるとも思った。この図には矢印を加えた方がいいのではないかと思った。

左の職員体制、右の施設・設備が、真ん中のサービスに向かっていく、両側からそれぞれ、職員体制から右上、施設・設備から左上に向かってサービスに入り込む矢印と、そのサービスから目指す姿に向かって昇っていく上向きの矢印、その3本の矢印が加わると、両サイドからサービスを支え、そのサービスが目指す姿に直結するんだっていうことが、一発で分かるかなという風に思った。

森委員：

確かに…。その矢印を勝手に補足して見ていた。

菊地委員：

僕らは矢印を頭の中で補足できるが、そうでない方は、この図をパッと示されたときに、この4つの小さな三角形がどういう関係性なのか、ちょっと読めば分っても、直観的には分からないのかもしれない。

目次の話になってしまうが、僕の認識が間違っていないのであれば、「将来像を実現するために」の(1)(2)(3)には僕の中では階層がある。(1)求められるサービス、というものは将来像を実現するために直結するものだが、(2)と(3)は、むしろ、(1)のサービスを実現するために求められる要素としての職員運営体制であり、施設・設備・立地であるという認識なので、2(1)が、求められるサービスだとしたら、(2)と(3)は併記されるというよりは、求められるサービスに必要な職員運営体制であり、施設・設備・立地であり、ということなので、(2)のa、(2)のbというような標記に

なるのかなというイメージを持っている。そこは目次の見せ方、標記の話なので、「ご検討ください」というところではあるが…。

話を戻すと、先ほどの森田委員と3つの要素は、確かにそのとおりだと思う。まず情報というものがあるところにあって、それが『場』というところに、自然と集まってくるものもあれば、図書館側が外に取りに行って、集めてくるものもあると思うが、オンラインもオフラインも含めて、図書館という場、空間に情報が集まる。この時点で空間のなかに情報があるという状況だと思う。

そこに人がアクセスしてくる、あるいはアクセスさせることで、情報がある空間に人が入ったときに、サービスが生まれるというイメージだろうか。そうすると、このポンチ絵でいくと、『サービス』というところで、その、空間と情報と人っていうものが出会っているような状況というものも生まれている。

**森田委員：**

『人』には職員も入るし、市民も入る。情報も市民側が動くことによってもたらされるものもあるので、本当に理想的なのは、そういう場ができること。職員がすごく大変な労力をかけなければいけないようなものではなく、自然とぐるぐると回っているような場ができることが、一番の理想。エコシステムというか、自然循環みたいな、循環システムのような。そういう場を作ることには心がける、心がけ出来るっていうことが大事。

**伊東委員長：**

文章がポンチ絵の説明になっていなければいけないので、その意味でポンチ絵をどうするかは大事だと思う。

それでは、一旦休憩にします。

===== 休憩 =====

(※休憩に入ったが、委員の意見交換はずっと継続している)

菊地委員：

説明がとても難しい…。

森委員：

森田さん、『空間』は、『場』とイコールではなく、ものすごく相互的ないろいろなものが、その中で渦巻いているような所ですよ。

森田委員：

そうです。シーンもあるし、時間の流れもあるし…すごい所。

伊東委員長：

だから情報も、図書館の本棚にあるだけではない。だから、この図を見ていて「どうしよう…」となってしまう。「地域のために」という言葉は、情報そのものも地域だし、場…空間も地域のなかにあるし…。

森田委員：

そうなんです。

森委員：

人って情報源だし。

森田委員：

『情報』って、人が情報だと思うから情報なのであって。だから重い。

吉成委員：

そこは何か表したい。「人から」というところは。

伊東委員長：

表せるかなあ…。日本の図書館の将来を今、語っているような…。

森田委員：

その表現として『シビックプライド』というものもあるわけですよ。

吉成委員：

そうです。そうです。そういうことなんだね。

森田委員：

でも、プライドだけじゃないっていう話もあったりして…。

こういうのをまとめるのは、一人で書かなきゃいけないくらいのことだが…。みんなで書こうとすると合意形成ができない。

森委員：

「委員がそう言っている」と言いながらも、書く作業は、最後には一人でまとめることになると思う。

やはり目的は松本の未来。「松本市民の未来」と言った方がいいかもしれないが、「図書館が…」というよりも、「図書館を使って…」ということだと思う。

森田委員：

この議論は深い。例えば基本構想の「幸せを目指す」。「幸せってなんですか？」という話。どういうときに人は幸せと思うのかというような議論になってしまう。

菊地委員：

キャッチフレーズの一番の突っ込みどころはそこ。「誰にとっての豊かさと幸せですか？」ということ。

森委員：

「一人ひとり違うよね」ということが、ちゃんと認められていて、自由な選択ができるということではないかと思う。

伊東委員長：

ポンチ絵、最初に書いたのは誰だっけか、三角の…。

菊地委員：

僕が最初書いたものですか？

伊東委員長：

うん。(ホワイトボードに板書しながら。以降、図を書き加えながらの意見交換)  
こっちが施設でしょ。

菊地委員：

僕が最初に書いたものは三層構造になっていて…写真が議事録に載っている。

ここにビジョンのような感じで『目指す姿』としてあって、ここに確か『ミッション』とした。ここは、何をすべきかということで『サービス』。そのサービスを支えるものとして『ハード』と『ソフト』。ハードが『施設』で、ソフトが『人』という構成だった。  
これを三角形に展開してもらった図になっている。

伊東委員長：

だから、そう。ここにこう入ったので、ちょっと意味合いが違ってきた。ブロックになってしまった。

菊地委員：

ああ、そうですね。図書館の場合はこの、「何を提供するか」というサービスが、組織としてのミッションなので、企業で言うところのビジョン・ミッションピラミッドで言うと、こういう話になる。

伊東委員長：

これが上に来ないと、何か変だと思う。

菊地委員：

外面的にはこういう話だが、これをこういう形でやるのであれば、やはりこの矢印がほしいという話を先ほどしたところ。



伊東委員長：

そうだと思う。『人』だし、『情報』だし…今日は施設というよりも『空間』という話になっている。最近『場』とも言ったり、いろいろだが…、(図に書き加えながら)これがまとまって、『サービス』を作り上げて…イカミたいな形になったが…、目標というのか、『目指すもの』になるという、やはりそういう構造なのだろう。

ここに入り込んでしまうと違っていく。こういかなければいけないで…。そう話すのであれば、素案に載っている図はキレイで好きなのだが…。

森田委員：

多分、この『場』は、ここ。

森委員：

うん、うん。そう思う。

菊地委員：

僕もそういうイメージ。人と情報が交じった瞬間のことを『場』と呼んでいるような気がする。

森委員：

それが、空間としてはリアルかバーチャルか…。

菊地委員：

どちらもあるということ。

伊東委員長：

そうすると、やはりこれでいいということだ。

森委員：

伊東委員長、今の画の中で『場』を『サービス』に移すだけで、しっくりはくる。

『空間』イコール『場』というよりは…。

森田委員：

具体的な空間がここにあって、それが合わさったのが『場』。

森委員：

『サービス』のレベルに『場』があるのではないだろうか。

森田委員：

そこは空間なり、環境なり…情報が入っているから、やはり空間かな…。

森委員：

空間でいいと思う。

伊東委員長：

空間とは、何？

森委員：

空間はリアルな図書館、あるいはバーチャルな図書館。

『場』というのは、空間よりももっと物事が起こっている状態、人と人の関係性が生まれている状態というのか、そういうものも含めて『場』と呼んでいるのではないだろうか。

菊地委員：

「そういうことが起こり得る場」というニュアンスも含むものだと思う。さっき「瞬間」と言ったが、その瞬間が起こり得る可能性があれば、そこも『場』と呼んでいいと思う。

森田委員：

そうすると、この『人』にはスタッフも入るし、市民も入って、ここで繰りひろげられる場ができてくる。

森委員：

やはり、ミッション・ビジョン・ストラテジーになっている気がする。  
伊東委員長に書いていただいたとおり、目標があって…。

伊東委員長：

これは昔の…今もそうなのだが、『人』・『資料』・『施設』が合わさって、図書館サービスがあって…。「図書館サービスは何するの？」というところに、結局、落ち着くのだろうか。

昔は、ここが『本』だった。これは、昔は『職員』。職員だけだった。そこに最近は『利用者』が入るようになった。今、『人』と言うと両方、入る。昔は『職員』・『本』・『館』だった。

だが、先ほどの私たちの話は、これは当然、『市民』全部だし、『職員』はここに入っている。デジタルにあって、幅広いものが入るし、『空間』もバーチャル空間を含むものになってきて、それが合わさることでサービス空間ができあがるところに目標があるのかというような…。

イカだな。

森田委員：

『サービス』というのも、誰のためのサービスか、という感じになってしまう。

森委員：

『サービス』と言うと、一方通行に感じる。日本語で言ってしまうと「奉仕」だし。  
もうちょっと違う言葉で表現したい。

森田委員：

本当にこれ、ここら辺がまちみたいな魅力を出せればいい。まち。

吉成委員：

ああ、まち。『まち』、いいね。

森田委員：

人が集まって…『まち』も入ってくる。

森委員：

そうか、まちか…。一人ひとりがこれを見たときに、自分の居場所がありそうな気がして…。

森田委員：

メタファーとしての『まち』であって…。

伊東委員長：

ここは図書館のあり方が入ってくる場所。「何するの？」という部分がここに入ってきて、「それはなぜ？」という、ここに『まち』があり、暮らしがありというような。

森委員：

人がいるだけではダメ。情報がそこにあるだけではダメ。それを融合させるような何かが真ん中にあるから図書館として機能するということ？ 図書館を構成する要素がちゃんと融合している状態。それをメタファーとして『まち』と言われていたのですね。

森田委員：

そう。『まち』と、もしかしたら市場（市庭）もあるかもしれない。

森委員：

「図書館は、知の広場だ」とか…。

森田委員：

『広場』はすごくいい言葉だが、それこそ、アントネッラ・アンニョリさんの考え方になる。やはり、人と人が「あ～！ どうしたの？」と、出会って、「最近、何やってるの？」みたいな話から「ああ、これだったらあるよ」というような会話が『まち』で起こっていくということと、図書館でやることは同じ…。

吉成委員：

『まち』ということで、イメージがある。去年の12月にイタリアの「知の広場」アントネッラ・アンニョリさんたちと議論したときに即興で画にしてくれたら、『まち』になった。今の『まち』というのは、すごくいいキーワードだと思う。そのときに話していたこと、「図書館とは何なんだろう」と言っていたときに画を作っていたのを思い出した。

『まち』で人が溢れているなかにサービスが見えてくる」ということの表し方は、非常に伝えやすいと思った。

伊東委員長：

これ、1回目だよ。1回目の図にまた戻ってきた。「どこまでやるの？」と聞いたときの図。これが松本市だが、図書館は松本市を支える柱の1本なのかというような話…。

森田委員：

その時、伊東委員長は「全部」だと言っていましたね。

伊東委員長：

そう。そうなのだが、もちろん、図書館そのものがガッツリ押さえられるわけではない。それでも全部に関わることはできる。

森委員：

その中でも「図書館の強みはここだよ」という話もされていた。

森田委員：

そういう意味では、情報はかなり強い。

伊東委員長：

先ほど『基盤』という言い方をしたのは、結局、これを抜きで語るわけではない。本当は別構造もあって、やはり『情報』が一番の基盤にあって、「『いかす』のは人でしょ？」『つなぐ』のは職員でしょ？」と。つながれるのも人、人が介在し…要は人が動かなければ何も動かないから、やはり、ここにドカンと大きな柱として『人』があるだろ？ という作り方もある。

森田委員：

化学反応は起きるが、起こすのは『人』。

森委員：

普通に考えると、あそこにあるのは図書館の目標。ミッション。それは、図書館がなぜあるのかと考えれば、図書館のためにあるのではなく、市民のため、地域のためにある…。言葉が出そうで出ないが、大事な局面に来ている気がする。

…今、既存の図書館が融解して別物に変わっていく体験…渦中にいる感じがします。

伊東委員長：

図書館のあるべき姿というのは、これだという言い方でいい？

菊地委員：

『目標』というのが…。

伊東委員長：

『目標』というのは目指すところなので、これが「あるべき姿」で語るのかということか。

森田委員：

僕一枚紙は、ここを作るということを…もちろん、パワーアップしていくけれど、ここの考え方が弱い。ここを作るということなのではないかと…。

伊東委員長：

そう思う。

森委員：

そうすると、その『目標』は、図書館を超えている話になる。

伊東委員長：

文章的に言えば、ここはもうスローガンでいいというような…。何でもいいのだが、目標だよ。そういうものに乗ってしまえばいいだけで。

要はあり方というのは、ここをどういう風にしていくというのが、あるべき姿。今の話で言えば、そこが弱いよ、ここをしなきゃ…資料もいっぱいあるし、職員も市民も無論いるのだが、それをキッチリここへ高める動作としては、読書好きの人たちだけじゃ支えられないでしょ？

森田委員：

こういう関係性もある。つながることの関係性。この関係性というところに学びがある。「学びの場」というものを作ろうではなく、まず「関係を作ろう」ということ。関係を作れば、学びの場は自然とできる。「関係性を作ることが図書館のミッションだ」と、いうような。

文学もそう。文学の内容と自分を関係づけて「わあ～、いいなあ」と。本と人との関係はそう。

より豊かな関係性を作れる場というのは…。喋ることができないと、人と人の関係性を作りにくい。あとは、狭い、座る場所がない、これでは全然、関係性が作れないので、それなりの広さが必要。話題提供としては資料が大事。

**伊東委員長：**

その話からいくと、ここの部分ですよね。2番の方でア、イ、ウで、先ずネットワークを挙げ、ICTもあるということでICTも出て、最後の空間…文言はともかくとして、『つなげる』ための…。内容とすればいいのではないかと思う。6回の流れは、基本的には筋は通ってきている。

**森田委員：**

ネットワークもICTもツールのようなもの…。本は本で、それをどう見せていくか。場の演出ということも…。だから、この辺はスタッフの力量にかかってくる。専門性が発揮できる。調べる、検索…探索？ パスファインダーもそう。2030年の目標というのは、松本市の中長期計画？

**菊地委員：**

10年計画なので、中長期と呼んでいい。

**森田委員：**

それもちゃんと考えられる、と。それをベースにしていくと、ちょっとこう…。もっと…。

**伊東委員長：**

私たちが報告する図でいくと、ここは別に具体的な言葉でなくてもいいでしょう。

**森田委員：**

いいです。

**伊東委員長：**

『目標』でいいと思う。何を目標にするかはサービス計画だと思う。

**森田委員：**

そうです、そうです。

**伊東委員長：**

僕らがそれを、「松本市はこうあるべきだ」という姿を、描き出すなんていうのはおこがましい。理屈を述べればいい。それに向かうための「何とかは…」というのが本文に出てくればいいということで。だから、この中に全市民がいる。ここから参加している。

**森田委員：**

本当はそう。「席がある」ということです。

**伊東委員長：**

それで、市内のあらゆる情報がここに行く。空間がある。その拠点としての役割は図書館が『館』としてある。その役割を持つことになっていいのだろう。

**森委員：**

『まち』ですね。『まち』ということになる。全市民が…。

森田委員：

…出てきて、「まち場に繰り出す」というヤツ。『まち』は昔からそうだと思う。自分たちが作ったものを持って行って…。

森委員：

物々交換をしたり…。

森田委員：

お金以前に必要なものを得るために、自分が作ったものと交換するためにやって来る。  
だから、消費される図書館ではない。人がまた落としていってくれるから。

森委員：

そうすると『サービス』ではない気がする。

森田委員：

そうです。本来的には、『まち』の機能…。

菊地委員：

むちゃくちゃ難しい…。何が難しいといって、これを提出して読む相手のことを考えなければいけない。読む相手にとっては『サービス』という言葉を使った方が通じる。相手が持っている言語体系の中で我々が言いたいことを伝える努力をしないと、こちらの独りよがりになってしまう。

「『サービス』ではなく、こういう言葉を使うのが正しい」と言おうとすると、その言葉の定義づけをしなければならないといので、ここで思っていることをどこまで出すのかということがすごく難しい。

伊東委員長：

昔の図書館3要素というような話は、図書館人の話であって、今さら説明してあげなくてもいい。ズバリ、ここは図書館のあり方として入っていいと思う。

森委員：

一度、『サービス』から離れないと、その概念が今までどおりの枠から逃れられない。『サービス』という言葉はやはり『奉仕』であり、一方的で消費的で…という風に感じてしまうので、できれば別の、よりわかりやすい言葉を使えるのならそうしたい。

「サービスします」と言うと、相手は受け身になる気がする。でも、こちらは「参画してほしい」と思っている。それをどう伝えるかだと思う。

菊地委員：

図書館のあり方という意味では、『サービス』という言葉は、主体性があるとも捉えられて、こちらが何をするかということにおいては、多分、『サービス』という言葉でも言い当ててはいると思う。これまで『図書館サービス』、『レファレンスサービス』は、いわゆる「サービス価格！」というものとはニュアンスが違う。その『サービス』という言葉は公共性を伴っている。その『サービス』という単語のふり幅において、単に身を切ってやっている奉仕と、公共性を伴っているものの違いというところがあるので、そのニュアンスは『サービス』を使っても、言外に伝わるとは思う。

より積極的にいくのであれば、森田委員が言われたような、図があって、『サービス』という

言葉をアップデートしました」ということを冒頭で断らないと、「ここで委員が言っているこの言葉はこういうことだ」ということが伝わらないので、図解が一番だと思う。

この報告書の中では『サービス』という言葉の代わりに、『サービス』をアップデートしたこの言葉を使うということを最初に断った方がいい。

森田委員：

『サービス』は一方的な感じがするので、cowork とか action とか、何か言葉が必要だと思う。

吉成委員：

うん…そうですね。

森田委員：

『行動』…。

伊東委員長：

どちらにしても、ポンチ絵はポンチ絵で、「情報とは何ぞや」、「人とは何ぞや」を説明しなければダメだと思う。それに乗って、ここに載せるのであれば、『サービス』であっても、ここで言っている図書館サービスは、「私たちはこういうものでイメージしている。サービスは本を貸すということではない。もちろん、それも含んでいるが…」というような説明を加えていく。

だから、ここで『まち』とか横文字とか、いろいろなものを加えていくと、それこそ、「今ここで、それを共通項とできるか」という議論もしなければいけない。

菊地委員：

そうなりますね。

伊東委員長：

それはすごく大変だと思う。それよりも、今ある…要するに、読んでいる人にも共有できている言葉を説明していく。図書館関係者ではないので、そもそも『図書館サービス』という言葉がどう伝わっているかは問題だが、「ポンチ絵に出た言葉は、こういう言葉として使っています」ということは言いつつ、本質的なことをきちんと、「あり方としては、どう考えています」ということは書かなければいけない。

ただし、さっきの話からすると、そんなに分量をかけられそうもないので、基本的にポンチ絵の説明くらいで、委員の共通認識…ベクトルの部分をサラッと書いて、「それはこういうこういうことです」と。

委員が書いた文章に入る最初のページには、「それぞれいろいろな立場のなかで持っているものも、言っているものも違う。それをまとめるという作業は私たちにはできないので、それぞれで読んでください」という話をキチンと書いて、それぞれが述べるというような作りかな。

菊地委員：

報告書を作成するという当面のタスクに対しては、伊東委員長の考え方が得策だと思う。

読む側にとって慣れ親しんだ使いながら、「この言葉は、この報告書ではこういう意味合いで使っているから気をつけて」という、言葉の説明をすることがいい。

「ここでは『サービス』とはこういうことだと捉えています」というように説明を加えた方が、得策ではないか。

森田委員：

今、手元で検索した辞書なので、これが一番ではないかもしれないが『サービス』は、相手のために気を配って尽くすこと」とある。『相手』は、全ての人ですね。スタッフが市民へ…ということではない。「相手のために気を配って尽くすこと」ということが、お互いそういう気持ちになっていけば、確かに『サービス』になる。

伊東委員長：

初回の画を見ると、『図書館サービス』よりも、『図書館活動』の方が近いような気がしてきた。『サービス』というと、やはり、「尽くす」ということが出てきてしまう。

森委員：

これが双方向ならいいが…。

伊東委員長：

『図書館活動』という言葉だと、『活動』は利用者もいて成立する言葉なので…と考えると、「全ての活動」「アクション」「アクティビティ」というような雰囲気になれば、むしろ『図書館活動』の方が近いような気がする。

しかし、昔は違う意味で使っていたので、いまさら『図書館活動』という言葉を使う？

森委員：

言われていることはそうだと思うが、新しい姿を見せようとしているので…。

だからと言ってアクティビティと…英語にすればいいのか、ということもある。

森田委員：

武蔵野プレイスは『アクション』と言っている。

『サービス』でも、それぞれが立場を入れ替えるという考え方はいいのではないかな。

森委員：

菊地委員が言われた『アップデートされたサービス』。「私たちが考える『サービス』は、こうということであって、双方向性があるものを考えている。お互いがお互いのためにという…」。そういう補足説明をしながらの文章にすればいいのではないかなという感じがする。

森田委員：

宗教的なものをあまり入れてはいけませんが、キリスト教で言うところのサンデーサービスのようなこと。お互いに尽くす、というような。

菊地委員：

難しいね。どうしてもちょっと…。

森田委員：

この図が完成だとすると、これでいいのではないかと…。

伊東委員長：

形はこういうことだと思う。あとは具体的に言葉でどう作るのがとても大変なので…。

でもやはり、市民が加わってくると『活動』なんだな。あらゆる要素が入り込んでいるこれは…。でも、『図書館のあり方』と言われると『活動』ではおかしい…。こじつけて『サービス』を



説明するか。

森委員：

菊地委員が図を書かれているので説明を…。

菊地委員：

前々回かな、僕が書いたのはこれだった。「企業のビジョン・ミッションモデルに則って考えれば…」という話をしたが、みなさんの話を聞いていて思ったのは、公共図書館であれば、ここのビジョンは、松本市が共有するものとして掲げているはずだということ。つまり、図書館のビジョンが何かといえ、ここは松本市のビジョンと重なるはず。

だから、我々が図書館のあり方を考えるということは、このビジョンを考えることではないということにラスト 50 分くらいの時点で気づいた。つまり、ここはいらないということ。

企業であれば、その企業がどういう風景を見たいのかということがすなわちビジョンになる。企業はそれぞれに主体性があるので、自由に決めていいが、図書館の場合、ここは既に規定されている。それを規定したのは基本構想 2030。

森委員：

そうは言っても、その外側にもっと大きな図書館としてのものはあるけども…ということですね。

菊地委員：

そう。でも、松本市図書館という公共図書館としては…。

森田委員：

『市民のビジョン』。市のビジョンではない。

伊東委員長：

本当の部分は「市民一人ひとりの幸福」というようなもの。

森田委員：

「だから、触れない」というのは、そのとおり。

菊地委員：

ここはないものとして…なくはないのだが。「ここまででいい」という話になって、ミッションというものが図書館の役割でもあるし、役割は言わば、あり方の話。その役割はビジョンにつながるもの…という話であればいいわけですね。

「図書館はこういう役割を果たせば、ここのビジョンにつながる」ということが暗に示せばいい。

森委員：

そう思う。

菊地委員：

では、「図書館の役割とは何か」ということになると、さっきここで話していたことで、3 要素…空間があって、そこに情報が入ってきていて、それを人が人につないでいる。人が空間の中で情報を手渡した所を『場』と呼んでいるのではないか。それは森田委員の言葉で言うと、「関係性

が発生した瞬間」。

森田委員：

そうです。

菊地委員：

その関係性の中に学びがあるわけですね。人と人が情報によって結ばれた空間が場である、と。

森田委員：

「これいいよ！」って言われた瞬間にできるのが『場』。

菊地委員：

その『場』を創出することが、図書館の役割であり、あり方である、という話ですよね。

森田委員：

そうです。

吉成委員：

うん…うん。

菊地委員：

その『場』の創出の仕方、作法のようなものを『サービス』と呼んでいる。図書館はどうやってそういう場を、人と人が情報で結ばれた状況を作るのかという、それが『サービス』。

森田委員：

ビジョンは、例えば、子ども食堂をやるといって、「いい」という人と「いけない」という考え方もある。子ども食堂をやりたい人が、ここで「子ども食堂をどうやってやったらいいかな」というようなことを考えることがいいのか悪いのかは関知しない。

森委員：

だからレファレンスサービスなどの具体的なサービスが出てくる。

菊地委員：

それは『サービス計画』になる。人と人を情報で結ぶ時の空間をどう設計するか、というような話、その作法が『サービス計画』になるはず。だからやはり、これでいいのだと思う。図書館はリアル、バーチャルにおいてどういう空間を、器として情報の受け皿として用意する必要があるのかという話。そこには、どういう情報がその受け皿に入ってきてほしいかという話。その受け皿に入ってきた情報を松本市民につないでいく『場』の創出をする人、図書館職員であり、運営体制であり、組織はどうあるべきかという、人の話。

それを今、上から順に下ってくる形で話したが、報告書では「こういう空間を用意します。こういう情報を集めていきます。それを人に届けるためのこういう職員が図書館にいます。その3要素によってこういう『場』を創出します」「この場を創出することが、図書館の役割であり、あり方です。以上。」

「それは松本市が掲げているビジョンにつながるでしょ？ 学都でしょ？ 終わり」と。

森委員：

できた。

菊地委員：

僕の思考の整理です…。

森委員：

個人も本や情報を通じて他の人とつながっていると考えれば、関係性という意味では、全てにおいて関係性はある。

森田委員：

関係性を持つか持たないかは自由。機会は均等に与えなければいけないので、寝ている人でもOK。

事務局：

今、使っている人たちも、ちゃんと入っているんだよということは入れないといけないけれど、本人たちはそういう気持ちは全くなく、一人で使っているだけ。『関係性』を持たない人も多いと思われるので…。

伊東委員長：

どこだって多いです。それは今までの図書館づくりが、そういうものだったから。

森委員：

ゾーニングという概念がどこかに必要。「すべての人の居場所」と言うのであれば、従来型というか、孤独になりたい人の場も必要だとは思う。

森田委員：

誤解を招く言い方かもしれないが、そういう自分ではどうにもならない人を助ける、市役所の別の部署の人がいるはず。「俺はもうダメだ…」と、頭を抱えている人に対しては、市役所の別のスタッフが専門性を発揮するべき。

事務局：

そこに繋げるのは図書館ですね。

森田委員：

その通りです。

吉成委員：

この図は三角形で上下を表しているので市役所が上になっているように見える。90度回して、左から右に進む矢印のようにして人と市がヨコに対置するような形にしてはどうか。

その方がフェアな感じがする。今は底辺から上がってくるように見える。下からのエネルギーと上からのエネルギーという言い方ができるかもしれないが、できればヨコがいいかなという気がした。

森田委員：

情報と空間と人はセットですか？ これはどうしましょう。

上下関係というのは人だけの話ですか？

吉成委員：

人の話だけど…。

森田委員：

この三つはセットで考えた方がいいかなと思っています。

吉成委員：

そうですね。

森田委員：

これだけをヨコにするのではなく、全部を？

吉成委員：

全部、ヨコに持っていってもいいように思ったが、下の方が分かりやすい？

森田委員：

ここが『市』になっているからかな？

吉成委員：

そうかもしれない。

森委員：

『松本市』ではないですね。

森田委員：

「目指す生活」「暮らし」みたいな。

吉成委員：

それだったら、この置き方でもいいね。そっちの方が合う感じ。

森委員：

「実現したい世界」ですね。

伊東委員長：

これ全部、松本市なので。さっきの話で言うと、この目標が矢印でイカになっているが、例えば、本当はマルになっていて、今、図書館の関係で議論しているが、実はここには福祉があり、ここには何かがあり…と、ぐると囲んでいて、「市はこういきたいんだ」という総合的な話があって、多分、この、ぐるとつながっている。

そのつながり方は、濃い薄いがあるのだが、幸いなことに図書館はその全てとつながることができるので、その図は生きる…というような考えかもしできるが、そこまで語ると話が大きくなってしまうので、ここだけ切り出した図かなという感じがする。

それと、『下支え』は、図書館の仕事としてはいいと思っている。あまり「引っ張る」という仕事でもないという気がしているので。

さっき『まち』と言った、あのイメージはここだと思う。

吉成委員：

はい、そうですね。そこですね。

伊東委員長：

言うなれば全体で…これは理念みたいなもの。松本市の行きたいところ…？

吉成委員：

そうですね。

森委員：

他の部署は、その部署ならではのリソースを使って、みんなが求めているところへむかっていくんですよ。

伊東委員長：

基本構想 2030 の基本理念「豊かさと幸せに 挑み続ける 三ガク都」を 10 年がかりで目指すわけだから。

森委員：

そのうえで、みんなが同じ目標に向かって、それぞれの強みを生かしてやっていくんだけど、図書館は、それをしながらみんなを支えているという両面を持っていたいと思っている、ということだと思う。

「全部」というのも、「下支え」というのも、「基盤だ」というのも…。

森田委員：

まだ決まっていないのが、『サービス』。ここで言う『サービス』は全く新しい考え方ですよ、という部分。ここだけ決まっていない、何かは分からない。『サービス』なのだが、それは今まで的一方通行の図書館員が奉仕するだけじゃないっていうように端的に言ってあげるのか、「『サービス』じゃないです」と、言ってしまうのか…。

よく、教える教えられるという関係が逆転することがあるが、先生と生徒の関係とか…あれと同じ。だから、図書館の人たちも市民からの要望に教えられる。「あ、こんなことがあるんだ…」と。そういう関係だと、『サービス』なのだろうか。どちらがサービスしているのか、していないのかという話になると両方。相互に教え合っているというように。

そうすると、『サービス』というよりも、『動き』。関係性だが。

森委員：

これを使って、サービス計画を作っていくときには『サービス計画』というキーワードを使うことになるのだろう。

森田委員：

『サービス計画』と言うんですね。

森委員：

それを思うと、定義して、『バージョンアップ版のサービス』と言ってしまった方が次につなぎやすいかもしれない。

サービス計画を作るが、この報告書で言っている『サービス』というのは、こうなんです」と

いう説明をしながら使っておいて、「それに基づくサービス計画はそういうものです」と、一方通行ではないものを上げていくということではないだろうか。

**森田委員：**

混乱するかもしれないが、僕は『サービス』とは、この場を作ることだと思っている。「この場を作る方が、何かを渡すよりも大きな最終目標だ」と、そこを言えればいいのではないか。

足がかりという感じで。「最終目標はこれだ」と。

**菊地委員：**

現状の図書館サービスはもちろん、アップデートされた新しいサービスも含まれる。人と人の関係性ではなかったとしても、人が人を介して、空間の中で情報と出会うことを『場』と言っている。それは、今やっている資料を選書して購入して並べて、見せるということも大事な関係性づくりになる。一人で来た人が、そういうことは知らず、自分の意志で「この本」と言って読んだ瞬間に、その本を選んで買った司書さんを通じて情報と出会っていることになる。それは関係性。表面的に見れば、その人とその本の関係性でしかないが、その本を棚に挿した人が必ずいるからつながっている。そういうことをさっき森委員が言われていた。

**森田委員：**

現状のサービスを否定などしない。むしろもっとやらなければならない。

もっと配架計画を、どういう風にしたらいいか。

日頃、手に取ってほしい冊子を並べて、「どうしたらいいんだろう…」って、やっているのと同じですよ。関係性を作りたい…。

**菊地委員：**

僕はその一冊を「はい、どうぞ」って手渡さないけど、棚に置くという行為で、「はいどうぞ」をやっているつもりでいる。書店員はそう。司書さんもそれは同じはず。

**森田委員：**

同じ。

「分類だからねえ」ということではない。平台がもしあったら、「これはここかな…」と。

**菊地委員：**

それを背挿しでもやってほしい。

**伊東委員長：**

『サービス』という意味での補足を少ししておけば、今、図書館の4要素は、『空間』、『情報』、『職員』、『市民』と言われている。それを行う図書館の活動のことを広い意味で『図書館サービス』と言っている。今の考え方は、『図書館サービス』のなかに『市民』を入れている。そうすると、『市民』が入っている以上、一方通行ではない。『市民』もここで動くから。そうではなく、『職員』しか動かないとすれば、ここに『市民』が出てこない。

今、図書館の考えがそこまで整理できているか、よく分からないが、『市民』を含めて『図書館サービス』の場だという位置づけを今はしているので、そういう意味では『サービス』でも間違いではない。ただ、捉え方が『図書館サービス』って、そもそも、本を貸している所でしょ」というような前提があるので、そこはきちんと、あり方として説明しなければいけないそのものと

被ってくるので、説明も含めて書いていくのかな、という感じですかね。

**森田委員：**

これだったら、どんどん自分の言葉で説明できますね。

**森委員：**

話していて、一番、思いが強いと思う。それを共有したいと思っているじゃないですか、みんな。だから、書けますよ。

**吉成委員：**

今の関係性というところを…関係性を是非、出してください。

一番始めに申し上げたのが「学びから学び合いへ」という言葉だったので、それは『サービス』に置き換えても同じだと思う。そういうものをいくつか例示しながら、アップデートしているという言葉を作ればいいというのは賛成です。

『学び』という言葉を『学び合い』へ。『場』という言葉を『広場』という言葉にできるかもしれないし、『サービス』という言葉を使いながら、それをバージョンアップして、「例えば…」ということで入れていけばいいのではないのでしょうかね。

先ほどの議論どおりです。

**伊東委員長：**

今回集まったみなさんも、それぞれの現場でこれを言い換えて…特に県立図書館では、今、作っているようです。そちらでもいずれ役立つかもしれませんが、いずれにしても、いろいろと議論していただいてありがとうございました。

以上